魔法少女リリカルなのは～ごちゃまぜガ○ダム救世主への道～

闘我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～ごちゃまぜガ〇ダム救世主への道～

【Ｎコード】
Ｎ５７８４Ｉ

【作者名】
闘我

【あらすじ】
白石光太郎は飛ばされた
誰に？
神様に
目的は？
世界を救う為
そうして飛ばされたのはリリカルマジカルな魔法の存在する世界。
今日も美少女魔導士達と共にごちゃ混ぜガ〇ダムは戦う

プロローグ～ごちゃ混ぜガ〇ダム誕生～（前書き）

はじめましてこんにちは。
闘我といいます。
この作品は魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳのアニメ本編より少し前から始まる二次創作です。
またこの作品の主人公調子乗ってる上に下品な主人公になるかもしれませんのでご注意ください。

プロローグ～ごちゃ混ぜガ〇ダム誕生～

ごく普通の高校生だった俺。白石光太郎(しらいしこうたろう)はある日。
気がつけば、周りどこぞの遺跡みたいな所でロボットに囲まれていた。
周りの壁には訳の分からない文字が刻まれている。
最悪だ。どういう始まり方だよこれ。恨むぞ神様。
とはいえやる事は一つだろ？とりあえず今の状況を何とかしようぜ。
俺の手元には、俺の妄想が具現化する種が１つある。何かの植物の種にも見えるがこれこそが俺の切り札。
これに賭けるしかねえ。
妄想だ。いつもやってたろ？学校の糞下らない授業を聞いてる振りしていつもやってるみたいにやればいいんだ。
勝てる俺を妄想しろ！！
俺はどうせ生まれてこの方ろくに体を鍛えてない唯の学生だ。
なら、それならば、ムキムキに鍛えれた肉体になればいい！！
最強の武器を妄想しろ！！
俺は生まれてこのかた武術なんて習った事はない。
なら、それならば性能の高い武器でその差を埋めてやる！！
最強の防具を妄想しろ！！
俺はどうせ生まれてこの方死ぬ事が一番怖いと思ってる臆病者だ。
なら、それならばそんな俺が戦える様に絶対の安心を与えてくれる鎧を！！
光が溢れてくる。俺の手の中にあった種は光を放つとすぐ様俺の体を包み込んだ！！

ーーーーーーーーそうして出来上がったのが、良く分からん、ごちゃ混ぜのガ〇ダムだった。

色は白。うん。ガ○ダムといえば白だ。白い悪魔。うん。問題ない。
唯なぁ…その姿がなぁ…俺の頭部をすっぽり覆うフルフェイスの頭部は、どっからどう見てもシャイ○ング。俺の上半身には1対の青い翼の生えた胴体ちなみにヘソの部分にはゲロビの射出口もついてる…ス○フリだろコレ？両肩には田螺みたいなのが二つついた鎧が覆っている…ツインド○イブだよな？両腕を覆う篭手は掌に射出口がある。それなんて運命？下半身を守る脚甲のつま先はそれぞれ空へと延びるようにブレードが伸びている。うん。正義。
両腰には、2本の可変式の実体剣。これもOOだよね。
絶望したーー！！自分のテンパッタ時の妄想力の酷さに絶望したーー！！！
ねえよ…何でガ○ダム？
俺の中で最強なのってガ○ダムなの？
しかも殆ど種って…確かにあの作品のガ○ダムは理不尽な程強いけど！！
出撃して傷一つ負わず帰還ってどんだけーとか思ったけど。
だからこそ、この姿なのか？
目の前のロボットを見つめる俺。
カプセルみたいな円錐の体をした機械だ。そんなんに視界に収まりきらん程の数で囲まれている訳ですよ。俺。
そりゃテンパルよ。
ってそうこうしてる内にガジェットが何か撃ってきた。ビームかあれ！！
危ないって！！このガンダムの装甲はビームに弱いんだぞ！！そうだ。ガ○ダムなら飛べるよな！？羽まで生えてんだ！！自由の翼だぞこんちくしょー！！飛べーーー！！
そう祈ると背中と両肩からG○粒子まき散らしながら飛べました。
「飛べた…。でも弾幕薄くならないんじゃ意味なくね！？」

下にいるガジェットはひたすら俺に向かって撃ち続ける。
俺は何とか必死にマ〇ロスのバ〇キリー並みのアクロバットでそれを回避し続ける。
常識的に考えてこれ絶対ゲロ吐くぞ。スゲーなア〇ト君。
かくいう俺はガ〇ダムスーツの所為かそれほど苦にはならない。
自分で言っててなんだけど、ガ〇ダムスーツとハ〇サムスーツって似てね？
洋服の〇山に売ってそうだ。
うん、関係ないね。ごめんね。そんな場合じゃないね。
とりあえず、下の雑魚共を片付けよう。うん。
せっかくだし、色々試そう。そうだヘソビーム（正式名称忘れた）はどうだろう？あれ地味にゲロビだし威力あるんじゃね？
そう思ったら即行動。俺は地面に向けてヘソを向ける。そしてヘソに力を込めて腰を後ろに下げてから前へおもいっきり打ちつける様に前へ出すろヘソから赤黒いビームが地面に一直線に飛んで行った。

ドカーン！！

擬音を言葉で表すならそんな感じ？地面にクレータが出来てる…。
うーむ。さすがキ〇様の機体。本編であまり使われなかった割には凄い威力だ。
大半が爆発と同時に誘爆しながら壊れていく。

「まだ残ってるか。ならドラグーン！！」

四肢に力を込め背中が反る様にピンと胸を張る。ドラグーン発射のポーズと言えばこれでしょ？
すると、背中から青い翼が何枚も外れ地面に向かって飛んでいく。

「マジで、飛んだよ。よーしっ！！当たれぇぇぇぇ！！！」

キ〇様ばりに声を張り上げながらドラグーンを飛ばす俺。
すると、ドラグーン達は俺の意思を感じたかの様に、次々と先端から緑のビームを出し一撃で確実に1体1体を落としていく。
すげえなこれ。気がつけばあれだけいたロボット達が全滅だよ。見た目あれだけどすげえ強くね？このガ〇ダムスーツ。

「動かないでください。」
「へっ？」

気がつけば俺の背中には先端の尖った何かが押し付けられていた。
全然気づかなかったぞ！？今の今まで何処にいたんだこの人。
声からして若い女の人だと思うが、さすがに後ろに目がついてる訳じゃないし姿は見えない。
唯、何と言うか物凄くヤバいのは確かです。うん。

「時空管理局の者です。両手を上げて動かないでください」
「分かった。分かったからその背中に押し付けてる物騒なの外してくれ。」
「そちらの武装解除が先です。ゆっくりと地面に降りて下さい」
「はぁ…分かった」

俺は渋々ゆっくりと下降し始めた。
そして考えた。
どうするよ俺？
時空なんたらか何だか知らないけどここで捕まると俺の目的が達せないんじゃないのか？
とはいえ、どう考えてもこの後ろの奴デキルぞ。ガキの頃から強い奴には近づかない様注意していきてきた俺だ。相手の実力を見抜く自信だけは俺にはある。丁寧な物腰だが、まるで刃物でも突き付け

られた様な殺気を感じる。まぁ実際刃物か知らんが何か背中に押し付けられてるんだけどさ。
そんなこんなであっという間に地上へ降りてしまった俺達。
両肩と背中から粒子の放出が止まる。

「武装を解除してください。その変わったバリアジャケットも解除してください。」
「・・・・・・・・」
「…早くしてください。こちらも穏便に事を運びたいんです」
「いや、これ、どうやって脱げばいいんだ？」
「えっ…？」

何か怪しまれてる。
色々考えたが結局俺はこの女に従う事にした。
だってこの世界がどういう世界かも分かってないのに、俺の目的なんざ達成出来る筈がない。世界は広いんだ。とりあえず最低限の情報だけもらってトンズラ。それが俺の考え。
でもさ、これの脱ぎ方マジで分からないんだが。

「ふざけないでください。自分のバリアジャケットを解けないなんて事ないでしょ」
「いや…マジなんだけど。そもそもこの姿になったのだってさっきが初めてだし…」
「初めて…？嘘言わないで。そうでなければこの遺跡を守っていた３０機以上のガジェットを倒すなんて無理な筈です」
「いや、だから…あっそうか。解除方法分かった」

今思えば簡単な事だった。俺の妄想を具現化したガ〇ダムスーツなら俺の妄想でまた元に戻れば良い。
ええっと…変身解除変身解除変身解除！！！

頭の中でそう唱えると再び俺の体は光に包まれた。そして俺を覆っていたガ〇ダムスーツは光の粒子となって周りの空気へ霧散していく。

「よし出来た！！おい！！これで文句ないだろ！？いい加減背中の物騒なの降ろしてって…どうした？」

反応が無い。しばらく経って背中に突き付けられた何かも殺気もなくなっている。
ちらりと首を後ろへと向けると視界に入ったのは女の子だ。
外人さんか？日本人ではありえない金髪に赤い瞳。
ハッキリ言おう。滅茶苦茶可愛いぞ。
人形みたいな娘ってこんな娘の事を言うんだろうな。
さらさらの金色の髪は二つに結われている。ツインテールだ。ツインテールってアニメとか漫画の世界だけだと思ってたけど、似合う人は本当に似合うな。
全身は黒いスーツみたいな服装に見えるが、その上に白いロングコートみたいなのを纏っている。
まるでコスプレの様な格好だ。そしてその右手には彼女の身長よりやや短い位の斧みたいな物が握られていた。
さっき突き付けられていたのはこれだな。
しかし、さっきから何の反応もないな。てか顔赤くね？

「なぁあんた大丈夫か？」
「っっっこっち振り向かないでください！！」

俺が心配して振り向こうとしたら彼女は自分から背中を向けると両手で自らの顔を隠す様に覆った。なんだってんだ？

「なんだよ？さっきから」

「気づいてないんですか？」
「はい？」
「その…かです」
「何？聞こえない」
「だから、…だかです」
「聞こえないって！！はっきり言えよ！！」
「だからさっきからあなた裸なんです！！」

へっ！？
急いで下を見るとそこには、…おれの愚息があった。
…なるほど大体分かった。
変態じゃん！！俺！！冷静に考えたらこの女の前で全裸になったって事だろ！？
そりゃ、固まるわな。

「テスタロッサ。そろそろ交代のじ…か」

何かまた来たー！！この子も目の前の金髪美少女の負けず劣らずの美人さんだ。
目つきが鋭いのがまた良い。
ピンクの髪を一つに後ろで結っている。ポニーテールだな。
絶滅種だと思ってたがありがたや。
そして彼女の服装はまるでどこぞの騎士様だな。
っていうか剣持ってるし。
ってかあれ？何か目の前の女の方怒ってませんか？
プルプル体が震えてる。
ヤバい殺気！？

「死にさらせ！！破廉恥が！！」

鞘から抜き放たれた剣からもの凄い剣圧が飛んでくる。
魔人剣ですか？
そう考えたが最後、体全身に痛みが走ると同時に俺は意識を失った。
ああ…こんなんで救世主になんてなれるのか俺？

プロローグ～ごちゃ混ぜガ〇ダム誕生～（後書き）

どうでしょうか？
小説自体書くのが初心者なんで、何かアドバイスや誤字脱字等あれば連絡くださると助かります。
ああ…書くのって疲れますね。読むのは好きなんですけどね。
後名前出てないですけど一応最後に出てきたのシグナムです。

1―1　とりあえず事情聴取（前書き）

難しい…小説書くのってやっぱ難しい。
更新遅めですが、良ければお付き合いくださいな。

1―1　とりあえず事情聴取

皆さんこんにちは。
白石光太郎です。
突然ですが、今俺何か縛られています。
何か光る縄みたいなので縛られています。
なにこれ？
全然力が入らない。
ちなみに、今は裸じゃなく何故かTシャツとGパン履いた状態で椅子に座らされている。誰かが着させてくれたのか？

「さて？聞かせてもらおうか？貴様あそこで何をしていた？」

ピンクのポニテの女性が鋭い目つきで俺に問いかけています。
分かると思うが素っ裸の俺を魔人剣で気絶さしてくれた女性だ。
その横ではもう一人先程の金髪の娘もいる。
唯まぁ、案の定俺と視線が合うと赤くなって、目を逸らす。
…不覚ながら可愛いと思ってしまった俺がいる。

「答えろ。さもなくば。」

そう言うと彼女は手元に握っていた剣の柄を握った。
その瞬間先程の記憶が蘇る。
体の節々が痛み始める。
古傷が痛むとはこの事か？
言ってる場合か！！
…ヤバいだろ！？
あれもう1回とか絶対無理だから！！

「ヒィ…！！」
「シグナム。駄目だよ。彼怯えてる。」
金髪の娘が俺を庇う様に、ピンクの娘に言い寄ってくれている。
可愛いだけじゃなくて優しいんだな…この娘。
惚れるぞ。正直。

「テスタロッサ。この男はどう考えても怪しいだろう。誰もいない筈の遺跡に急に現われている事といい、お前の見たという白い鎧の様な姿といい。そして何より急に…は、裸になる様な男など怪しい以外の何者でもないだろう！！」

…裸の所で一瞬躊躇したな。
やっぱこの娘も女の子だな。

「それは私もそう思いますけど。いきなり目の前で剣を抜かれたら怯えてしまうのも無理ないですよ。彼だって話しにくくなります」

…やっぱこの娘にも変態のレッテルは貼られてるくさい。
まぁ…仕方ないけどさ。
俺だって、裸になるなんて思わなかったもの。
それはさておき、このままだと平行線だな。
俺が話さない限り、金髪の娘も俺を解放する気は無さそうだし。
この世界の人間との接触を控えろなんて事は言われなかったし、大丈夫か…。
それに、正直この世界の事を知りたいって言うのもあるが、目の前の2人はそれなりに強いのは分かる。
まぁ…俺が相手にしなきゃならない敵がどれくらいの強さか分からないが、どちらにせよ協力してくれる人が欲しかったんだ。
この人達に話してみて良ければ、協力してもらおう。

無理ならガ〇ダムスーツを着れば良い。
ちと乱暴だし下手すりゃ怪我するけど無理じゃないだろ。
神様がくれた力だ。どんな魔法だろうが科学だろうが敵う筈がない。

「分かったよ。話す。でも…どうせあんた達信じないぜ？」
「それはこちらが判断する。いいから話せ」
「じゃあ言うぜ？俺は神様からこの世界を救う為に引っ張られてきた救世主（セイバー）だ」

ブンッ…！！
問答無用で斬りかかられた！！
咄嗟に首動かしてなかったら首飛んでたわ！！

「うおっ！！危ねえなぁ！！おい！！」
「ふざけるな。悪ふざけに付き合ってやる程、暇ではない」
「だから言ったんだ。信じないって」
「貴様っ！！いい加減に！！」
「待ってください、シグナム。彼の話聞いてみましょう」
「テスタロッサ！？」
「神とか救世主とかはともかく、あの力が普通じゃないのは確かです。話を最後まで聞いてみる価値はあると思います」
「…分かった。話せ」

助かったぜ。どうもピンクの方はキレやすいというか。生真面目というかそんな感じの娘らしいな。金髪の娘がいてくれないと話が進まん。
さて、俺も状況を整理する為にもこんな事になった原因の糞みたいな神様の話をしますか。
でも、その前にだ。

「とりあえず…その剣納めてくんない？」

１―１　とりあえず事情聴取（後書き）

一応次回にでも光太郎が何でこんな事する事になったかを明かすつもりです。

1―2　シスコン？褒め言葉だ（前書き）

…難しい。
本当に小説書くのは難しい。
そして物凄く文字数が多くなってしまった。すんません。

１―２　シスコン？褒め言葉だ

突然だが俺には、２つ年上の姉がいる。
名前は白石朱音（しらいしあかね）
ちなみに今の俺は１７。姉さんは１９歳って事になるな今なら。
腰まで届く程の黒髪のロングストレートがとても魅力的な姉さんだ。
もちろんそれだけじゃない、スタイルだって抜群だぜ？
こうボンッ！！キュ！！ボンッ！！って感じでさ。
顔も滅茶苦茶綺麗なんだ。こう…なんて言うのかな言葉に表せない位綺麗なんだよ！！
…説明になってねえな。でもな…綺麗な姉さんなんだ。
特にあの目だな。本人はあまり好きじゃないみたいでカラーコンタクトで隠してたけど、綺麗な赤い色の瞳をしてたんだ。
宝石みたいでさ。俺は今まで生きてきてあんな綺麗な瞳を持った人間見た事ないよ。
これだけ説明してたら、察しの良い人は分かると思うけどさ俺は姉さん大好きっ子だ。
シスコン？
俺にとっちゃ褒め言葉以外の何物でもないさ。
小学校低学年の時まで将来の夢で姉さんとの結婚って書いた位だぜ？
まぁ、今思えば少し恥ずかしいけどさ、別に後悔はしてない。
でだ、そんな俺の人生の中で８割以上を占めていた姉さんが

１年前突然消えた。

行方不明とかじゃねえぜ？無論死んだって訳でもない。
消えたんだ。この世界からさ。
はじめからそんな人間居なかったみたいにさ。
最初はドッキリかと思ったよ。母さんも父さんも俺の友人も姉さん

の親友だった人も皆が皆姉さんの名前を出すと口揃えてこう言うんだぜ？

「誰？その人って」

いや、皆俺確かに姉さんが急に姿消したから寂しいけどさ。いくら何でもそんな風な気の使い方しなくてもって思ったよ。
でもさ、皆変な顔するんだ。こいつ何言ってんだ？って顔で俺を見てるんだ。
そんな目に耐えられなくなって、俺はすぐさまそいつ等の元から逃げてしまった。
そんで携帯開いたよ。俺の待ち受けは、俺と姉さんとでその年の春に俺の高校の入学式の朝に撮った写メだった。その時は母さんに撮ってもらったんだ。俺の肩に手をおいて携帯に向かって笑ってた姉さんの顔がまた綺麗な写メだった。俺のお気に入り姉さん画像の１つだった。でもさ…携帯開けて画面見たらさ。居ないんだよ…。そこには俺が一人で笑ってる画像があるだけでさ。
何これって思ったさ。それから俺はありとあらゆる姉さんとの思い出の写真や学校の友人や教師に姉さんの事をもう１度見直したり聞きなおしたりしたんだ。
でも結局結論は

そんな人間いない。

これしか無かった。

ふざけんな！！
その言葉しか俺の頭には思いつかなかった。
俺はそれから何度も姉さんが最後に行くといっていた公園へ足を運んだ。

小さな遊具と砂場があるだけのどこにでもある様な公園だ。
何で消えた？なんで俺だけ覚えてるんだ？
それをそこで延々と考え続けた。で気がつけば1年が経ってた訳だ。
正直俺も諦めかけてた。
疲れたってのもある。
姉さんの事で周りの人間は俺を何かヤバい奴か何かの病気かと思ってる人間もいた。
親も何度も俺を病院に連れて行こうとしたんだ。
ヤバいだろ？これ。姉さんの事は大事だが、母さんと父さんに心配をかけるのも気が引ける。
だからさ、俺その日何も姉さんの事が分からなければもう諦めようと思った。
そんな時だ。

「なんだ？諦めるんですか？」

声がする？誰だ？声からして小さな女の子みたいな声だ
キョロキョロ首を回すが今のこの公園には俺以外誰もいない。
だが、そんな俺を笑う様に声は続けて俺に話しかけてくる。

「見えませんよ？あなたから私を見るのは無理です。ここに居る様でいませんからね私は」
「…やべえ。俺マジで病気か？姉さんを思う限り変な幻聴が」
「幻聴じゃありませんよ！！ちゃんとあなたに語りかけてます！！」
「また幻聴が…帰るか。マジで病院行こうかな…」

そう言って俺は座っていたベンチから重い腰を浮かすと公園の出口へと向かって歩き始めた。

「ああっ…もう！！分かりました！！姿を表せばよろしいのでしょ

う！？」

そんな幻聴が聞こえると視界に入ったジャングルジムが捻じれた。
いや比喩でもなんでもない文字通り捻じれたんだ。

「正確には空間を捻じったんですよ」

さっきと同じ声が聞こえる。
同時に目の前の捻じれた空間から誰か出てきた。

「子供？」

その姿を見た第一声がそれだった
いやだってさ。誰がどう見ても子供だ。
小学生位か？
まぁ綺麗な子だとは思うよ？銀髪に、赤と緑の左右色の違う瞳。
身に纏っているのがなんつーんだ？ゴスロリっていうのかこの服装。
コスプレか何かで着てるのを何度か見たことあるが正直目の前のこの子程似合ってはいなかったぞ。
やっぱこれ日本人には似合わんのかね？この子どう見ても日本人じゃねえだろ。

「第一声がそれですか？姉弟揃って同じ反応とは。ここまでいくと益々あなたに決めたくなりました」

今なんて言った？

「おい、お前今姉弟って言ったか？」
「はい。言いましたよ。白石光太郎さん」

俺の名前を知ってる？どういう事だ？

「どういう事だ？ですか。まぁ人間がそう思うのは当然ですね。初対面の美少女が急に自分の事を知っていたら疑いたくなるのは当然です」

自分で美少女とか言うなよ。ってか俺の考えた事が読まれてる！？

「そうですよ。私は神ですから人間であるあなたの考えなんて読めるのです。そして私は客観的に見ても美少女というのは事実です。現にあなた自身が第一印象で綺麗と思ったではないですか」

「…否定出来んが、神ってのはどういう事だ？」

「ですから神です。ああ、変な宗教の勧誘ではありませんからね。そこの所勘違いしない様にお願いしますね。」

そう言うと笑顔でこちらに、ブイサインを横にしながらチェキしてくる。

丁寧な言葉づかいで急にはっちゃける様なポーズを取る自称美少女神様。

ああ…こいつは

「スンげー胡散臭い…」

「どこがですか！？」

「全部だよ！！」

まぁ、確かに相手の思考読んだり空間捻じ曲げた人外の力で人間じゃねえっていうのは認めても良いが、自分の事を神様だなんて言う奴信じられるか？普通。

「失礼な。全く。なら、証拠を見せて差し上げましょう。あなたが

昨晩買ったエロ本の数は3冊ですね？タイトルは順にドキドキ家庭教師のおね「OK分かった。信じよう！！神様！！あんたは神様だ！！だからそれ以上口に出すのは止めてくれ！！」
「分かれば良いのですよ。分かれば」

えっへんと胸を張る自称神様。
うぜえ…。

「何か言いました？」
「いいえ。何も。それより続き話してくれ」
「それもそうですね。あなたの姉が消えたのは異世界を救いにいった為です」
「はい？」

なんて言った神様。異世界？何それ？

「ですからここと異なる世界ですよ。見ます？色々ありますよ。あなたの好きなガ〇ダムみたいな兵器がある世界や、ドラゴンが存在するファンタジーな世界までよりどりみどりでありますけど」
「いや…見れるものなの？その異世界って」
「はい。見れますよ。ええっとどこにしまったかな」

そう言うと神様は再びジャングルジムのある空間を歪ませるとそこに両手を突っ込んでアレでもないコレでもないと何やら探している。
なにこれ？青狸のポケットみたいなもんか？
整理されてない所もそっくりだ。

「これは、世界破壊装置のスイッチだから…違う」

今すげえ物騒な名前の装置の名前が聞こえたが大丈夫かおい！？

「あ、ありました。これこれ。どっこいしょ」
おっさんみたいな物言いをしながら、両手を再び引っ張り出すと神様の両腕には小さなテレビが掴まれている。
「テレビ？」
「映像を映すという意味では同じですが、映すのはあなたの好きなアニメやドラマではありません。異世界の状態を見れる装置です。この間、神様間通販で買ったんですよ～。」
通販！？神様なのに通販！？
何だそれは！！
何が売られているんだ！！
「秘密です。ええっと、電源入れて、チャンネルを合わせて、これで良いでしょう」
なにやらボタンを弄るとそのまま小さな画面に何やら写し出される。
「ディバインバスター！！」
ズルっ…。思わずずっこけた。
白いコスプレ衣装みたいなのを着こんだツインテールの女の子がこれまたコスプレアイテムみたいなステッキを握りそこからピンクのビームをぶっ放していた。
「どうしたんですか？」
「何だこれは！！単なる魔法少女アニメじゃねえか！！どこが異世界だ！！」

「異世界ですよ？こういう世界もあるんです。ちなみに今あなたの姉はこの世界にいる筈です」
「何！？どういうことだ！！」
「ですからこの世界の救世主としてあなたの姉を送ったんです」
「姉さんが…この世界に」

画面を食いいる様に見つめる。相変わらず忙しく魔法少女らしき人物が謎の雑魚みたな見た目のロボット相手に無双してやがる。
こんな世界に姉さんが…だとすればいくら探しても見つからないのは説明がつく。

「なぁ…じゃあなんで姉さんは居なくなったじゃんくて消えたんだ？」

まぁ、異世界に飛ばされてこの世界からいなくなったのは分かるが、存在そのもが消える理由にはならない。

「最もな疑問ですね。良いですか？あなたには信じられないかもしれませんがこの世界は救世主候補が集まっている少し特殊な世界でしてね。常日頃からこの世界の人には異世界へ旅立ってもらっているんですよ。ですが、そんな常日頃から人が居なくなってはこの世界も混乱するでしょう？ですからその人は初めからいなかったという風に世界が勝手に描きかえるんですよ。まぁ…異世界に旅立つ際に存在そのものを対象の世界へ移動させてるからというのもあるんですけどね」

ええと…なんかさっきの会話の中でとんでもない世界の事実をバラされた気がするんだが。
要するにこの世界は救世主候補が住む世界で、救世主に選ばれた人間は異世界に行く場合存在事その世界に移動する為、元いた世界で

の存在が無くなるってことか？
それにより同時に救世主候補の世界での混乱が起こるのを防いでると。
良く分からんが

「ええその認識で間違ってません。それでですね今回私があなたに接触したのは理由があるんですよ」
「何？まさか俺にも異世界へ旅立てとか？」

ははっ、まさかな。

「正解です！！姉の尻拭いは弟にとい事で白羽の矢が立ったにですよ！！」
「マジですか？ってか尻拭いってどういうことだ？」
「あなたのお姉さんですね。突然姿を消してしまったらしいんですよ。まぁ私としましても救世主の役目を果たした後ならその方がどうなろうと知ったこっちゃないんですが、彼女、役目を果たす前に消えてしまったらしいんです。これには向こうの世界の神様のカンカンに怒ってしまいまして。急きょ代わりを送る事になったのです。」
「それが、俺？」
「はい。そうです。それにあなたにとっても悪くない話ですよ？」
「なるほどね…。まぁ悪くないな」
「おや…説明しなくても分かりますか？」

ああ分かるさ。要するにその世界に姉さんがいるんだ。
その世界に行くには、救世主になって使命とやらを果たさなきゃならんらしいが、んなもんはついでに果たせばいい。
姉さんを探せるんだ、これは俺にとっては大きな話だ。

「でも何で俺なんだ？別に俺世界を救える様な力持ってねえぞ？」
「まぁ…肉体的にみれば中の下といったところですね。それは問題ありません。救世主となる以上あなたにはある程度の力を授けますから。それより私があなたに惹かれたのはあなたの一途な思いですよ」
「思い？」
「あなたは、存在が消えた姉の存在を忘れずにいれる程彼女の存在を受け入れていた。ここまで真っ直ぐな人間はそうはいません。世界の理に逆らう人間なんて初めてですよ。あなたなら歴代の救世主の中でも5本の指に入るのも無理ではないでいでしょう」
「良いぜ。行ってやる！！その世界にさ！！で？おれの目的ってのは何だ？」
「まぁ…大雑把に言えば、世界を救うという事なんですがね。あなたには、魔王を倒していただきます」
「魔王？」

魔王？まじでゲームみたいだな。

「言いたくありませんが、この世界と似た様な世界で、魔王という俗にいう破壊者を異世界に送り続ける世界があるんですよ」
は？なんだそれは？
「その力も馬鹿みたいに強くてですね。その世界の人間の性能（スペック）では倒せないいわゆるチートみたいな存在が生まれる訳です。ですから、私はそれに対抗できる救世主を送り続けているのですよ」
「ちょい待て。俺にそいつを倒せという事か？」
「そういう事ですね」
「人を殺せってことか？」
「まぁそうですね」

ニコニコ笑いながらそう言いきりやがった。
見た目相応の笑顔だ。
普通なら和むんだろうが、この会話内容では笑えねえ。
というより、苛立ちの方が大きい。

「成程な。自分の手を汚さず、世界を救う訳か。糞みたいな神様だな。あんた」
「どうとでも。それが、私ですから」

悪びれもしねえ。
益々気に入らない神様だ。

「さて、それではこれを受け取ってください。」

そう言うと再び片手を先程の様に空間を歪めながら突っ込む。
しかし、今度はさっきと違って直ぐに出てきたその手の平をおれに向けてくる。

「種？」
「シードと呼ばれる。奇跡の種です。力が欲しいと思ったらそれを強く握って考えてください。自らの武器や鎧や能力を。ただし、使う際は良く考えてから使ってくださいね？決めれるのは初回起動時のみですよ？やり直しは効きません。別のセーブデータでなんてゲームみたいな事できませんので気を付けてください」

こんな種がねえ…。
力になるのか。

「分かった」
「ではでは、いってらっしゃい」

「っておい！！ちょっと準備くらいさせろや！！色々あんだろうが！！」

「知りません？」

語尾に？付けりゃ許されると思ってんのか！！おいこら！！

ってあれ、何か俺の足元が捻じれてる？

同時に俺の脚がズブズブそこに沈んでいく。

底なし沼かよ！？

どういう世界の旅立ち方だ！！救世主の旅立ち方じゃねえだろ！！

「おい！！まじでもう行くのかよ！？」

「がんばって？？」

だから、笑顔で語尾に？を付けてかわいこぶっても駄目だろうが！！

そう言おうとしても時既に遅し、俺は底なし沼に引きずり込まれる

様に捻じれた空間にひきこまれていたんだ。

1―2　シスコン？褒め言葉だ（後書き）

オリジナル設定です。
詳しい説明は次回のあとがきにでも。
疲れた…。
息抜きになってねえｗｗｗ

１―３　交渉決裂。そして気絶…（前書き）

後１回位で１話は終了します。
いつになったらなのは達を書けるのか…。

1―3　交渉決裂。そして気絶…

「とまあ、こんな感じ」

俺が話すと目の前の二人は何やら興味深そうに聞いている。
金髪の娘は顎に手を当てて、ピンクの娘は、腕を組みながらこちらに相変わらずキツイ視線を向けてくる。
地味に心臓に悪い。この状況。俺としては、知ってる事全部正直に話した。
これで信じてもらえなければ逃げるしかない。

「つまり、おまえは気がつけばあの場所に飛ばされていたという事か？」
「まぁ…そうなるな。いきなり、訳分らない機械に襲われて仕方なしに神様から貰った力を使っちまったらあんな白い鎧が出てきた訳だ。信じられないとは思うけどさ」
「シグナム」
「ああ、恐らくな…」

何やら二人して納得した様に頷いている。いったいなんだ？

「あなたの証言が本当なら今の貴方は次元漂流者と言う事になりますね」
「ジゲ…何？」

何スかそれ？そう聞こうとしたらピンクの娘が溜息をつきながらやれやれと言った様に口を開いた。
仕方ねえだろが！！んな専門用語言われて分かるか！！

「次元漂流者。簡単に説明すれば、次元震などが原因で偶然別の世界へ飛ばされた様な人間の事だ。お前の言う空間の歪みというのも、小さな次元震と考えると一応話は繋がる。まぁ、神だのシードだの訳の分からない事はまだ残っているがな」
「次元漂流者が現れる可能性は限りなく可能性としては低いんですが、今のあなたの話からしても間違いないと思います」

成程。この人達にしてみれば、今の俺は世界を股にかけた迷子と言う事か。
しかし、壮大な迷子だぜ。しかも、１７になって迷子扱いか。恥ずかしいでござる…。
次元震とかいうのは、あの空間の歪みの事と考えよう。
うん。説明されても理解できんだろう。俺の頭じゃ。（作者もあまり理解できてません…）
…てか、ちょい待て！！今この娘達別の世界とか言ったか！？

「なぁ？別の世界って、この世界は別の世界の存在を知ってるのか？」
「そうですね。とはいえ、その世界が別の世界に行ける能力を持たない世界は不可侵とされているので、全ての世界に行ける訳ではありませんが」

神様。あんた、とんでもない世界に飛ばしてくれたようです。
どんな技術だよ！！異世界観測できるって。異世界に行けるって！！
まぁ…でもその所為か案外俺が異世界から来たって言うのもすんなり受け入れらてるくさいし。助かったかも。

「しかし、それはそうとして先程の鎧。あれを渡して下さいませんか？」
「へ？」

なんか、妙な流れになってないか？

「ＡＭＦを無視する力か。魔法陣も出なかったらしいな。質量兵器の可能性が高い。

悪いがその兵器の存在はこの世界では認められていない」

…まずくない？俺からガ〇ダムスーツ取ったら唯の人よ？

そんな中この世界で姉さん見つけろって無理があるでしょ。

「なんで？質量兵器ってなに？」

「質量兵器というのは、大雑把に言えば、魔法を使わない物理兵器の事です。この世界では質量兵器は危険とされているんです。もちろん、元の世界に帰る時にはお返ししますのでそれまでこちらでお預かりさせていただきませんか？」

…可愛い女の子にお願いされて、一瞬頷きかけるが慌てて首をぶるぶる横に振った。

冗談じゃない。元の世界に帰るまでという事はこの娘達は俺を元の世界に戻してくれようとしてるらしいが、姉さんを捜せなくなる。

おまけに、魔王を倒すという、ついでの目的も果たせなくなる。

「悪いけど。それは無理。この力だけは誰にも渡せない。俺は姉さんを捜さなきゃいけないし、魔王を倒さないといけないんだ」

「また、それか。お前の姉を捜すのは私達も協力はしてやる。だがそのおとぎ話の様な嘘の話はいい加減やめておけ。お前の人間としての価値を下げるぞ」

…カッチーン！！！

こちとら、折角全部話したのに、結局そこは冗談と思ってらっしゃ

る様だ。
お前等こそ、少しは信じろや。そもそもお前等の言う魔法だって、危なくないんかい。

「悪いけど交渉決裂だ。ガ〇ダーム！！」

気分はド〇ン・カッシュ。縛られてて指鳴らせないけどさ。
俺の叫びと共に俺の体は再び光を纏い先程と同じ構成のガ〇ダムスーツを装着するとそのまま、拘束していた光の縄を無理やり引き千切る。
ブチブチっと音を出しながら引き千切るとその縄がふっと消えた。
この縄もこいつ等の言う魔法なのかもしれないな。

「嘘！！バインドが」
「ちっ…止むをえん！！レヴァンティン！！」
「「シュトゥルムヴィンデ！！」」

なんだ？今の声剣から聞こえた？
てんな事言ってる場合じゃない！！あの構え。
あの時の魔〇剣だ！！
やべえ、まだ纏っただけで、全ての機能が完全に稼働してる訳じゃないくさい！！！
まだ体が重い。避けられない。
死ぬわけじゃないだろうが、また痛い思いするのは嫌じゃぁああ！！

「ゴッォォドフィンガァァアア！！」

へ？上空から何やら熱血な声が聞こえる。
すると次の瞬間には、俺の目の前まで、来ていた剣風を炎の様な塊が消滅させると、そのまま地面に激突。結果として、助かったかも

しれんが

「んがっ！！！」

爆風に巻き込まれて俺はそのまま後方へ吹き飛ばされ何か後頭部に硬い物がぶつかり、壮絶な痛みと共に意識を失った。

１－３　交渉決裂。そして気絶…（後書き）

…グダグダだ。
最後のフィンガーは光太郎じゃありません。

主人公
白石　光太郎

年齢１７　身長１７５ＣＭ　体重６０ｋｇ

救世主候補の世界から今回選ばれた救世主。
重度のシスコン。
機動六課にて魔導士の少女達と共に戦う。
救世主の力「シード」と呼ばれる使用者の思いを具現化する力を与えられる。
光太郎の力はＧＭＧ（ごちゃ混ぜガンダム）
機動戦士ガンダムという光太郎の好きなアニメに出てくる機動兵器を自身の装甲として具現化している。ちなみにパーツの構成はその都度変える事が出来る為、様々な状況に対応出来る力を持つ。（正にチート）

１―４　後悔そして始まり（前書き）

…とんでもなく量が多くなってしまった。
今回フェイト視点です。
そして今回光太郎は気絶しているだけｗｗｗ

１―４　後悔そして始まり

初めは、唯の護衛だと思っていた。
随分前に見つかった遺跡を再度調査したいという人達が居て、その護衛を頼まれたのだ。
丁度その日は、今担当していた事件も一段落した所だった。
なのはから頼まれたのでは断る理由もなかった。
唯、調査の日程が３日程続けて行いたいらしく、２日目までは付き合えるが３日目にはあの子達と会う約束があった。
唯でさえ、最近は通信だけだったのだ。執務官という役職上、次はいつ纏まった休暇が取れるかは分からない。
直に会って話を出来る貴重な時間を失いたくはなかった。
それに関しては最後の日にシグナムが代わりに来てくれるとの事だった。
それには、少し驚いたが、彼女と会うのも久しぶりだ。
素直に嬉しいという気持ちが大きかったが同時に違和感も感じた。
何故なのはは、こんな事を私に頼んだのだろう。
自分で言うのもなんだけど、私やシグナムと言った忙しい人間にこんな簡単な仕事を頼むのは彼女の性格からしてあまり考えられない。
幼少時からの親友なのだ。その位分かる。
だからこそ、今回の護衛は、なにかある。そう考えた。理由を聞けば間嫌な予感がする。そう言うのだ。何か隠している。それは分かっていたが、あえてそこに突っ込まないのが親友としての私の考えだ。なのはにも何か考えがあるのだろう。そう思ったのだ。
そして、その私の考えは間違いではなかった。
２日目の夜。調査を切り上げようとした時の事だ。
その遺跡の一部には大量のガジェットが忍び込んでいたのだ。
すぐに私はバリアジャケットを身に纏い、遺跡を調査していた人を安全域まで飛ぶ事で逃がした。

そして再び先程の場所に戻ってきた時、私は自分の目を疑った。
先程まで誰もいなかった遺跡内部で誰かがガジェット相手に戦っていたのだ。
白い鎧を全身に纏っている姿からは、男性か女性かの区別はつかないが、大量のガジェットに囲まれ身動きがとれない様だった。
この遺跡には私達以外の人間はいない筈だ。
話は後で聞こう。そう考えると目の前の人を助けようと駆け寄ろうとした時だった。
その人は、急に背中の青い翼を広げ緑の粒子を飛ばしながら、飛んだのだ。
そして次の瞬間にはその体から光を放つと大量のガジェットを纏めて破壊したのだ。
何？あれは？
魔法じゃない？
ＡＭＦが端から無視されている様な破壊力。そして何より光を放つ際、魔法陣が全く展開されていなかったのも気になる。

「まだ残ってるか。ならドラグーン！！」

声からして男の人だろう。彼が叫ぶと同時に背中の翼が1枚1枚外れてそこには骨組のみ残った。しかし、外れた羽が次々と下へ降りて行き、そこから光を撃ちだし、先ほど撃ち漏らしたがガジェット達を破壊している。
まただ。魔法陣は出ていない。
質量兵器の可能性もある。とりあえず彼に話を聞いてみよう。

「バルディッシュ」
「「ソニックムーブ！！」」
大事な相棒（パートナー）に呼びかけると言葉にせずとも、バルディッシュは私の

発動しようとする魔法の名を力強く叫ぶ。
その瞬間私の体は一瞬で目の前の彼の背後へ近付く事に出来た
そのまま、バルディッシュを背中に突き付ける。
その後身に纏っている白い鎧おそらくはバリアジャケットとは思うが、得たいの知れない鎧を解除して欲しいと警告を行った。
少し、いきなりかもしれないけど、正直あの力を向けられると私一人では対処できるとは思えない。外には、調査隊がまだ残っているのだ。あの力があの人達に襲いかかるという可能性も捨てきれない。
意外と警告はすんなりと受け入れられた。
唯、自分で解除できないとか言いだしたので、私をからかっているのかと思い少し、ムッとした。どう考えてもあれだけのガジェットを一瞬で片づけた力を扱う人間がそんな事言うのは私をからかっているとしか思えなかったのだ。
しかし、何やら慌てた様子で必死に弁解するので、急に毒気が抜かれた。
少なくともこちらに敵意の様な物は微塵も感じさせなかった。
ただ、急に視界一杯に光を広げた瞬間鎧を解除したと自身満々に言う目の前の彼の姿は、…は、裸で。
背中しか見えてはいないが引きしまった体というのが見て分かった。
特に肩と腕の筋肉が鍛えられているのが分かった。
やっぱり、唯者じゃない。でも…いきなり裸になるなんてやっぱり、危ない人間なのかもと認識を改めると

「この破廉恥が！！！」

交代に来てくれたシグナムが彼に魔法を叩きつけて気絶させてしまった。
少し気の毒とは思うけど、正直同情は出来なかった。
だって、いきなり裸になる様な人だし…。
そこからは、気絶した彼に私とシグナムで、調査隊の方に男性の着

替えを借りて着替えをさせた。
出来るだけ見ない様に頑張ったけど、少し見てしまった。
ああ…恥ずかしい。
しばらくすると彼は、目を覚まし、自分の事を喋ってくれた。
名前は「白石光太郎」名前からして、地球出身の可能性ある。どうやら、次元漂流者の可能性が高かった。
お姉さんを探しているとの事らしい。家族の為にこの世界に飛ばされたという話を聞くとこの人は悪い人じゃないかなと少し認識を改めた。
唯、神とか魔王とかシードとか良く分からない単語を連呼しているので少し、この世界に飛ばされたショックで混乱しているのかもしれない。
保護して少し休んでもらえば落ちつくかなと思い、とりあえず先程の鎧を渡してもらう様頼んだ。そしたら、急に彼は態度を急変し、その提案は受け入れられないという。

「お前の姉を捜すのは私達も協力はしてやる。だがそのおとぎ話の様な嘘の話はいい加減やめておけ。お前の人間としての価値を下げるぞ」

その言葉をシグナムが言った直後だ。彼の瞳が急につり上がるとそのまま、

「交渉決裂だ」

そう言うと再び彼の体を光が覆いそのまま先ほどの鎧が彼の体を覆っていた。
そのまま、拘束魔法を無理やり引き千切るとこの場から去ろうとする。
恐らく、彼は私たちに本当の事を話していたのだ。

それを、彼が混乱していると決めつけてしまった為彼は怒ってしまったのかもしれない。
私達を信じて話てくれたのに、それを信じ切れて上げられなかった。
チクリと胸が痛む。
孤独だった筈だ。不安だった筈だ。見知らぬ世界に飛ばされて謎の力を手に入れて。
今からでも遅くない。ちゃんと話をしたい。そう思った時には既にシグナムは腰を深く落とし、レヴァンティンを構えていた。
止めようとしたけど、間に合わずそのまま魔法が発動してしまう。
当たる。これで、もう彼とは、分かり合えなくなる可能性が高くなった。
ソニックムーブで加速すれば間に合うかもしれない。
シグナムの剣は、正直疾い。間に合うかどうかは五分と五分。でもこのまま彼の信頼を裏切ったままでいるのも嫌だった。
その時だ。

「ゴッォォドフィンガァアアア！！」

上空から叫び声が聞こえると白石さんに当たる筈だった剣風が炎の塊によって消滅させられた。
地面をえぐり、砂塵を巻き上げる程の威力。
凄い力だ。
彼は大丈夫だろうか？
徐々に砂煙は晴れていくと彼が鎧を纏ったままうつ伏せで倒れている。

「白石さん！！」

反応がない。恐らく先程の一撃で気絶したのだろう。
脳に衝撃を受けたとしたら医者に一応見てもらった方が良い。下手

すれば、大怪我かもしれない。
駆け寄ろうとしたその時、凄まじい殺気が私達に向けられている事に気付く。
慌てて、上空へと視線を向けるとそこには、白石さんと、同じ様な鎧を身に纏った人が両腕を組み私達を見下ろす様に見ていた。
白石さんの鎧が色々ついているのに対し、全体のフォルムが綺麗に纏まっている。
色も白と青を基調に両肩には赤いラインが引かれている。何より背中に装着されている。白と赤の３対の翼が特徴的だ。
気がつけば彼は一瞬でその場から姿を消した。
そして、倒れている白石さんの元へ駆け寄るとそのまま片手で彼を担いでいた。

「貴様！！何者だ！！」

シグナムがレヴァンティンを構えるとそのままいつでも、魔法を出せる様に魔法陣を展開する。
私もヴァルディッシュをザンバーモードへ変更すると、両手で構える。金色の刃がまるで鎌の様な形を象るとすぐ様魔方陣を展開する。

「止めておけ。お前達では話にならない。」
「何だと！？」

これでも私達は、魔導士ランクＳ＋とＳ－。
驕りではないが、大抵の事件は片付けられる自信がある。
でも、それでも、私達はその場から一歩も動けなかった。
発動した魔方陣に魔力だけが高まっていく。
勝てない。
その言葉が頭を横切るのだ。一歩でも動けば命はない。
彼の緑の機械の様な細い瞳はそう語りかけてくる。

視線を向ける事は出来ないが、シグナムも恐らく私と同じだろう。
嫌な汗が体中から流れる。
バルディッイッシュを握る掌も例外ではない、それでもしっかりと握る。
滑り落とすなどしたら、一瞬でこの命はけし飛ぶのが目に見えている。

「まぁ…賢明だな。何、動けないのは悪い事じゃない。相手の力量が分かる。お前達がそれなりの実力者と言う事だ。じゃあ、こいつは連れて行く。心配するな。いずれまたこいつとお前達の運命の糸は絡まる」
「彼をどうするつもりですか？」
「何。少し話をして、調整するだけさ。こいつの世界のロリ神が俺に何の相談も無しに急にこいつを送ってきたものだからな、色々とこいつを弄って世界に対応させなけゃならん」
「神…。やはり彼の話は」
「事実さ。この世界は今ゆっくりと魔王の手で崩壊へ向かっている。お前等も急いだ方が良いぜ？機動六課だったか？早いとこ立ち上げないと手遅れになるぜ？」
「「！！？」」

何故六課の事をこの男は知っている！？まだ、設立が予定されただけで、六課の事を知っているのは一部の人間だけの筈。

「警告はしたぜ？急ぎなよ。じゃあな」

そう言うと白石さんを担いだまま彼は一瞬でそこから姿を消した。
やはり、魔法陣を展開せずにだ。一瞬で姿を消すという魔法でも難しい事を軽々とこなした鎧の男を追跡するのは無理だった。
何より、

カラン…

隣にいたシグナムの両手からレヴァンティンが地面へと滑り落ちた。
私も同様に両手からバルディッシュを地面へと落としてしまう。
緊張が解けた。自然と展開していた魔方陣も消えていく。

「「「「大丈夫ですか？」」」」

レヴァンティンとバルディッシュは私達を心配する様に声をかけてくる。
私達は「大丈夫」と「ああ」そう言うとその場に崩れおちた。
膝が震えてる。

「ここまで…実力差を思い知らされたのは初めてだ」
「そうですね…。それにあの人が言った事は白石さんの言っていた事と一致してます。はやてとなのはに知らせないと…。六課の設立を急ぐ様に」

あの警告の真意は分からない。何故彼が六課の事を知っていたのか。
そして、白石さんをどうするつもりなのか。謎は深まるばかりだ。
そして、聞かなければならない。なのはに。
恐らくなのはは、ここに白石さんが現れる事を知っていた。
だから私とシグナムをこの場所へ行く様に頼んだ。
なのはが少なくとも彼等について何かの情報を持っているのは確かだ。

「これは、久し振りに喧嘩かな。なのは」

そう小さく私は唇を動かすと攫われた白石さんの事を考える。

彼の言葉を信じていれば少なくとも彼は私達に協力してくれたに違いない。
あの男が言う絡まる運命。白石さんが敵となって現れるのか、それとも…味方として協力してくれるのか。
出来れば後者を願いたい。そして

「ちゃんと、謝りたいな」

１―４　後悔そして始まり（後書き）

長文お読み頂き、お疲れ様でした。
長々と書き、描写が下手だなと思い知った今日この頃。
一応次回から本格的にアニメ本編をなぞる形でオリジナル要素を加えながら進めていくつもりです。
ちなみに、分かりにくいと思うので、光太郎をさらった男の鎧の見た目はゴッドガ〇ダムです。

2－1　夢の中～能力制限～（前書き）

訂正とお詫び
え～とですね。最初に謝っときます。
すいません。
光太郎の能力ですが、主人公機のみという事に変更せていただきました。
色々パーツの構成を考えるのは楽しいのですが、何だか制限が無くなり、変な事になりかねないのです。（単に作者の力不足です）
本当に申し訳ありません！！
再び謝罪を。
申し訳ありません！！
訂正しました。
ターンエーは無しです。はい。あれはまだ光太郎の手には余る。
御助言ありがとうございます。名前は一応伏せますが、この場にてお礼を。
ありがとうございました。

2―1　夢の中～能力制限～

うっ…！！！

「…ん？あれ？ここ公園」

意識を取り戻した俺は、気がつけば旅立った筈の公園にいた。
もう日も傾き、カラスが鳴いている。近所の家から夕食の良い匂いがする。
…カレーか？

「成程…夢か！！」

今までの夢だったんだ！！
そりゃそうだ！！異世界だの！！ガンダムスーツだの！！魔王だの！！救世主だの！！
ありえない事だらけだ。
うん…。いくら姉さんの事を考えすぎとはいえ、異世界に飛ばされるなんて小学生でも考えないぜ。何考えてたんだ俺。

「…帰るか」
「悪いがそういう訳にもいかんぞ」

…何だこれ。
デジャヴ？ってヤツか。
夢の中じゃ自称神のハタ迷惑な美少女だったな。

「悪いが今回は美男子だ」

…スゲー嫌な予感がする。
とりあえず、声のするジャングルジムの方へと首を向ける。
誰もいない。
やっぱ幻聴か。

「現実逃避するな。上だ上」

嫌々ながら…言われるまま首を上へ向ける。
嗚呼…やっぱあれ現実だったのか。
だってじゃなきゃこんな奴目の前に居ないもの。
だけどさ、

「何故？ゴッドガンダム…」

そう。ゴッドガンダム。俺の好きなガンダムの内の1体だ。
某ゲームでは無類の強さを発揮し、続編では使い手を選ぶとんでもないピーキーな機体になったあのガンダムだ。
いやぁ…財布から１００円が飛んだなぁ。あの時は。
しかし、ジャングルジムのてっぺんで両腕を胸元で組むお決まりのポーズ。
…シュールだ。

「貴様の心象世界にはこれくらいしか、高い物しかないのだから仕方ないだろう」

馬鹿は高い所が好きって聞いた事あるが

「誰が、馬鹿だ！！」
「心の声に一々突っ込み入れんなよ！！ってか今更だけどここ何処よ！？あんた誰よ！！」

俺の全力の叫びに、やれやれと言う様に首を振りながらため息をつくゴッドガンダム。
…何かデジャヴだな。
ちょっと前にも似た様な事があった気がする。

「ビビるなよ？俺は、この世界の神だ。そしてここは、お前の心象世界」
「また、神様かよ…。」

ほんと、神様のバーゲンセールかよ？
人間やっててここまで神様と遭遇するのってどうなんだ？
もしかして一生分の運使い果たしてないか？

「ん？驚かないのか？大抵の人間は俺の事を知れば大抵ビビるんだが」

意外そうに、目を大きくした様な気がするゴッドガンダム。
機械の瞳だから細いままだけどさ。ＳＤガンダムなら間違いなくデカくしてたな。うん。

「異世界飛ばされてる上に、別の自称神には会ってるからなぁ」
「ふむ。なるほどな。世界への適応能力は上々か。アイツも今回は期待できそうな人物を送ってきたな」
「そりゃ、どうも。ってかアイツってあのロリ神か？」
「ああ。そうだ。あいつ、俺に何の断りも無しにお前を送りつけてきたから色々世界がバグり始めてんだよ。だから俺はお前と心象世界で話してる」
「さっきから気になってるだが。なんでここに俺いるんだ？元の世界に戻ってきたのか？」

確か、俺遺跡みたいな所にいた気がするんだが…。。

「いやここはお前のいた世界じゃないさ。何度も言うがお前の心象世界だ。おまえの夢の中とでも思えばいい」

「夢の中？」

「まぁ…細かい事は気にするな。とりあえずお前が寝てる間にお前の体を弄らせてもらった」

「えっ！？」

ちょ…おまっ！！おい！！俺の貞操は大丈夫か！！

「誰もそんな事してねえよ！！俺はノーマルだ！！」

「いや、神様って見境ないってイメージが…」

神話とかエロエロだろ？あれ大抵の話はさ。

「まぁ…一部の神にそういうのがいるのは否定しないが、俺は少なくともお前みたいな男に興味はない！！」

全力で拳を握り力説する。ゴッドガンダム。

何か、ド〇ンみたいだったな今の最後の部分の台詞だけ。

言ってる内容はとてもド〇ンが言う様な内容じゃないが。

「とにかく、お前の体を弄って種（シード）の能力に制限（リミッター）をかけた」

「へっ？」

「とりあえず、今までお前が使ってた機体の大方のパーツは現段階では使用不可とさせてもらった。後、使用できるのはお前の言う機動戦士ガンダムの主人公機（一部除く）のみだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・

えっ？
なんて言ったこの神？
「正確に言うなら、前半の機体のみだな。ガンダム、アレックス、ガンダム試作1号機、陸線型ガンダム、ガンダムマーク?、ゼータガンダム、νガンダム、ガンダムF91、ビクトリーガンダム、シャイニングガンダム、ウィングガンダム、ガンダムエックス、ストライクガンダム、インパルスガンダム、ガンダムエクシア。これだけだ」
「なんでさ！？」

遂、某主人公の口癖を口にしてしまう。
んな事はどうでもいいんだ！！
なんで主人公機（前半部分のみ）！？

「まぁ…理由としてはだ。強すぎるんだよ。お前の力が。救世主が持つにしては大きすぎる。下手すりゃお前がこの世界を破壊しかねない」
「ガンダムの力で世界が滅びるとかないと思うんだが」
コロニーでも落とすのか？
一部の機体は出来るかもしれないが、そもそもガンダムて機動兵器

よ？
そんなたいそれた事できるかよ。
…2号機はまずいかもしれないけどさ。
核弾頭積んでるし…。
…ターンエーとターンエックスもか。
GXもちとやばそうだが、どうも頭の中にあるデータの限りこの世界の月にマイクロウエーブ発信施設はないみたいだから、使えないって事でOKなのか？
冷静に考えると、色々やばい機体もあるな。確かに。

「少しは分かってる様だが…勘違いしている。見た目や能力はお前の言うガンダムかもしれないがその中身は神が直々に与えた力だぞ？使い方次第では、世界なんかどうとでもなる」
「マジっすか？」
「救世主が魔王を倒して魔王に成り変わるなんて事も普通にありうるんだよ。だから現れた救世主には、ある程度の制限（リミッター）をかけるのが普通なんだ」
「なんじゃそりゃあああああ！！」

おいこら！！前半部分の主人公機のみって、サブキャラの機体も使えないって事だろが！！
しかも、何か外伝の機体とかもないやんけ！？あれの主人公機はどうした！！
ブルーもなしかよ！！EXAM！！

「まぁ…後継機の方はお前のレベル次第でどうにかなる様にしてあるからそれで勘弁しろ」
「レベル？」
「ああ。ある程度までお前の力が増せば自然と後継機の制限（リミッター）は外れる様にしてある」

「使いたければ、強くなれと？」
「そうだ」
…どこのＲＰＧやねん。
レベル上げして強くなれって…。
そんな暇おしいって。

「俺は今すぐ姉さんを探したいんだよ！！」
「…それなら魔王を追ってれば直に会うさ」
「…どういう事だよ。つーか魔王ってなんなんだ。ロリ神もいってたけど、結局なにも分かってねえ。この世界でそいつはなにをしようとしてるんだよ？」
「魔王は魔王だ。おまえ等救世主とは違い、世界を破壊する為に存在する奴等さ。目的なんざ、その魔王それぞれだ。世界を壊そうとする奴もいれば、小さな犯罪を繰り返す様な小物もいる。唯、一つ言えるのは、その世界に悪影響しか与えないって事だ。この世界の魔王の目的は単純でこの世界を破壊する事らしい。朱音の事が知りたければ魔王を捜すしかないぞ。なにせ朱音に最後に会ったのは魔王だからな」
「くそっ！！結局魔王かよ。」
「……」

地団駄を踏む俺を観察する様に見る。ゴッドガンダム。
見世物じゃねえっての！！

「やはり朱音に聞いていたとおりだな」
「どういうことだよ？」
「お前の事はある程度聞いていたからな。いつまでたっても朱音から離れない手間のかかる弟だと」

…うるせえよ。
姉さん大好きでなにが悪い。

「やっぱ、お前姉さんに会ってたのか？」
「当たり前だ。おまえ同様ある程度制限(リミッター)はかけるからな」

…殺す

「なんでだ！？」
「お前姉さんの体弄りまわしたんだろ！！あの手この手でさ！！俺だけの姉さんなのに！！」
「いじってねえよ！！言葉のあやだろうが！！」
「犯罪者は皆そう言うんだ！！俺には効かん！！ガンダーム！！」

指を鳴らす俺。
あの時は縛られてたから無理だったが今度はちゃんと再現するぜ。
シーン…
俺達の間に冷たい風が吹く…。
何も起こらない。
あれ？なんで？

「もう1回！！ガンダーム！！」

シーン…やはり何も起こらない。

「何でだよ！！」
「制限(リミッター)の中に俺には攻撃出来ない様にしてあるからな」

くそっ！！卑怯な！！

「まぁ…そう怒るな。何もしてないさ。それより、そろそろ心象世界が崩れるな」
「ふざけ…えっ？崩れるって？」
そう聞こうとした時綺麗な夕焼けにピシッ…とヒビが入り始める。
なんだこれ！？
徐々に視界一杯にそのヒビは広がっていく。
「お前が目を覚まそうとしてるんだよ。あっ…1つ言い忘れてた」
「？なんだよ」
「お前の種（シード）を弄ったさいに、お前の力はこの世界の魔法に変わった事いうの忘れてた」
なんかこの人本当に神様か？えらい大事な事言ってる気がするんだが。
それを言い忘れたって。
「説明するにしても時間がないな…。とりあえずもう1度あの女達に会うと良い。色々お前にとっていい事がある筈だ」
「あの女？あの時の2人か？」
金髪とピンクの二人の娘が頭の中に思い浮かぶ。
金髪の娘には会いたいけど、ピンクの方には会いたくねえ…。
又ぶった切られるのが目に見えてる。
「まぁ…そう言うな。それが朱莉に会う一番近い道だ。おまえのレベルアップもしてくれる筈さ。…限界だな。俺に会いたければまた心象世界に呼び出せ。俺に会いたいと思いながら寝れば良いじゃあな」

その一言を最後に俺の視界に入る物全てにヒビが入り、ガラスが割れる様な音と共に視界全部が真っ黒になった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

急速に意識が回復していく。
後頭部に少し痛みがあるが気にしていられない。

「あの夢まじか？」

とりあえず、ガンダムスーツを身に纏う。
以前と同じ構成のパーツでしようとしたら。
ズキッ…！！！

「っ痛ぁ！！」

頭痛い…。何か突き刺すような激しい頭痛がした。
どうも、さっきの夢での限界（リミッター）がかかったっていうのは本当らしいな。
正直今はストフリの羽をイメージするだけで軽く頭痛がする。
ガンダムの事考える度にこんな頭痛がするとしたらとても要らん事をしてくれた様だ。あのゴッドガンダム。
てか結局なんでゴッドガンダムの姿してんのか。
聞くの忘れたな。今度聞いてみよう。
確か、寝る時にあいつに会いたいって思いながら寝るんだったか。

…キモッ！！

なんで野郎に会いたいなんて思いながら寝ないといけないんだ。

姉さんならともかく。

「まぁ…とりあえずここどこよ？」

見渡す限りどこぞの路地裏だ。
空は暗い。もう夜みたいだ。
路地裏といってもそれなり綺麗な方だ。
俺のいた町の路地裏なんかじゃ、地味に小便臭い所が大半だからな。
とりあえず、出るか。

…ドカァァァァァァン！！！

何だ！？
爆音！？
何か爆発した様な音がしたぞ！！
路地裏からでると爆音のした方の空を見上げる。
すると、そこには

「赤い女の子？」

見た目小学生位の赤い服の女の子がその手には似合わない大きなハンマーを持っている。
けん玉みたいな形だ。
まぁ…形は可愛いらしいが大きさが異常だ。
どう考えても何かを殴るのを目的としている様にしか見えない。
彼女の近くからさっきの爆音は聞こえた。
やっぱり、さっきのはあの女の子が？
あの子も魔法使いなのか？だとしたら話は分かる。
何を破壊してあんな爆音がするのか知らんが。

ピキーン！！

何だ！？頭に馴染み深い音が鳴り響くと軽く頭痛がする。
打ちどころが悪かったのかと思ったがそうじゃない事は次の瞬間分かった。
目の前の女の子を襲う無数の光が飛んでいた。
その光は地上から彼女へと伸びていく。
そして、彼女はそれを器用に避けながら地面へと飛び込んでいった。
自然と俺は足をその場所へ向けて走らせていた。

「なんだってんだ！！あの光、俺の予感が正しければ！！」

外れてくれ。
そういう予感に限って当たるというのは古今東西変わらないらしい。
異世界にきてもそれは。
到着した俺の見た物は

「ザク…なんでＭＳが居るんだ！？」

赤い女の子と大きな犬が５体位の人間サイズのザクと戦っている光景がそこにはあった。
世界の破壊。
どうも魔王っていうのは洒落でもなんでもない事をその時俺は強く感じた。

2―1　夢の中～能力制限～（後書き）

…本格的に本編に沿って？
…すいません。大半が夢の中という今回でした。
最後の方に出てきた赤い服の女の子と大きな犬。
分かると思うので名はあえて出しませんが時間的には2話の最後辺りのガジェット倒しまくってるシーンです。
分かりずらくすいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5784i/

魔法少女リリカルなのは〜ごちゃまぜガ〇ダム救世主への道〜

2010年10月9日18時35分発行